

e-dream-s 通信

No. 75 発行：2007年3月11日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

- | | | |
|-------------------------------|------|------|
| 1. 新 vs 旧 | 辻 荘一 | p. 2 |
| 2. 今週のデジタル／モバイル事情 | 井川好二 | p. 4 |
| 3. 春の訪れの前に・・・ | 山田昌子 | p. 9 |
| 4. 21世紀の学問の神様 | 塚本美紀 | p.11 |
| 5. e-dream-s ホームページと ECAP2007 | 仙崎裕右 | p.13 |



ネパール・カトマンズ 小学生を注意する先生

©e-dream-s

ネパール・カトマンズの学校 撮影：中川房代氏

新 vs 旧

代表理事
辻 荘一

昔まだビデオテープがなかった頃ほとんどのテレビ番組は1回放送して、それで終わりだった。例えばかつてのかつて大変な人気を博した人形劇「チロリン村とくるみの木」の映像は第545回、790回、811回、812回だけが現像しているだけで、他の大部分の回は見ようと思ってもどうにもならない。それこそ本能寺の変をもう一度見るのが不可能なのと同じである。ビデオという画期的な装置が発明されてからも、まだビデオテープが高価、保存場所に限りがある、などの理由ですべての番組が録画・保存されたわけではない。

しかしデジタル技術の進歩と比較級数的な保存メディアの大容量化によって現在すべてのテレビ番組を録画・保存することが可能になった。実際に今そうなっているかどうか分らないが近い将来そうなることは間違いないだろう。そしていつの日か家にいながらにして見たい番組を膨大な数の番組のストックから瞬時に検索し再生することができるようになることは間違いない。

これはテレビ番組に限った話ではない。音楽にせよ映画にせよ文学にせよ古今東西（といってもデジタル化以降のものに限られるが）ほとんどすべての「作品」が同様に簡単に自宅で見ることができるようになるだろう。

さてそうなった時、新しい「作品」は大変な競争に晒されることになる。現在新しいものが有り難がられる理由の一つは古いよい物が消えてしまったり、劣化したり、手に入れるのが難しいからである。あなたは、新品の状態の鑑賞したことのない古典作品と良いものかどうか分からない新作とではどちらを選ぶだろうか。

保存された大部分の「旧」作品は駄作だろうし時代を経て古くさくなっている物も多いかもしれない。しかしその中にはいつの時代も人を感動させる大傑作が大量にあるのは間違いない。しかも何の劣化もなく。その大傑作を簡単に探し出し手に入れることができるようになった時、私たちは新しい作品を鑑賞するだろうか。大傑作と保証付きの作品を鑑賞するだけでも人生は短すぎるかもしれないのに、どうして新しい「作品」を、つまらないかもしれないという危険を冒してまで鑑賞しなければならないのかと思うのは自然なことだ。

もちろんこれは将来の話である。しかしこのことから今まで自分は古典作品を不当に低く見てきたのではないか、新しいものを新しいというだけで有り難がりすぎ、尊ぶべき時の試練を経た「古典」を軽んじてきたのではないかということに思い当たるのである。だから新しい物好きの私としては反省するのである。新しい物を追求する姿勢や新しいものを受け入れる精神の柔軟さは大切である。しかしそこに拘りすぎてはいなかったかと。

そして e-dream-s の活動に対してもなにか自分達にしか出来ない新しいこと、ということに拘りすぎてはいなかったか、と。その考えに縛られたが故に逃してしまったことがあったのではないか、それよりもなにかしかりとした成果を残すことの方が重要ではないのかと。

現在、アジアに学校を作る計画が動き始めている。まだどうなるか全く分からないのだが、拘りを捨てて成果を残すことを最優先で取り組みたいと思っているのである。

今春のデジタル／モバイル事情

井川 好二

「へーえ、これがワンセグ¹のテレビ、どすか？」
「そや、きれいに映るやろ？」
「ホンニ、きれい。それに、画面も大きおすなあ」
「4.3 インチ」
「これに電子辞書もついてますねんね？」
「って云うか、電子辞書にテレビがついてるん」
「あつ、辞書もカラーどすか。字いも大きて、よろしいな、これ！」

毎年 3 月の今頃は、使っているコンピュータや周辺機器やソフトの、新規購入や update/upgrade を行う。まるで、漁師が愛用の漁網や釣り竿の手入れをするように、兵士が銃や剣をせっせと磨くように、自分のデジタル機器のメンテナンスをしたり、新しいものを買う替えたりするのが、新学期の準備をするのがルーティンである。自分で「デジタル軍拡」と呼んでいる。

これをやらないと新学期が迎えられないような気がする。新しい学生に新しい気持ちで向き合うための、長年の習慣である。

それに、デジタル製品やソフトは、定期的に update/upgrade しないと、いつか使い物にならなくなる、と云う消費者にとってはまったく理不尽な、製造販売業者にとっては、誠に好都合な世の中の仕組みとなっている。

それで、いつもは、パソコン、プリンター、外付けハードディスクの買い替えなどを行うことが多いのだが、今年の春はどういうわけか、モバイル機器に関する「軍拡」が重なった。行きつけの小料理屋の女将に、自慢気に見せたシャープのワンセグ対応電子辞書は、今春の「モバイル軍拡」の一環である。

¹ワンセグ 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』ワンセグは日本において、主に携帯電話などの携帯機器を受信対象とする地上デジタルテレビジョン放送である。2006 年 4 月 1 日午前 11 時 (日本時間) より、東京・名古屋・大阪など全国 29 都府県で開始し、2006 年 12 月 1 日にハイビジョン放送と同時に全都道府県で放送を開始した。現在はほぼ全ての放送局で行われている。

正式名称は「携帯電話・移動体端末向けの 1 セグメント部分受信サービス」



Photo: SHARP PW-TC900
Retrieved from HP: YODOBASHI²

「電子辞書って、初めてやねん」
「へええ、センセのお仕事にしたら、珍しおすな」
「そや、辞書なんかいらん、Walking Dictionary や云うてきてん」
「さすが、センセどすな」
「けど、それは大嘘」
「はあ」
「ホンマは、家でしっかり辞書ひいて、外で辞書使わんようにしてただけ」
「ほっほほ、負けず嫌いのセンセらしおすな。けど、ほな何で、ワンセグ？」
「眼えや。最近、急に細かいもんが、見えにくくなって」

以前からやや気になっていた老眼が、最近一気に進み、ペーパー・ベースの辞書を読むのが、非常に難しくなった。50代も半ばを過ぎればやむを得ない事態。それならばと、電子辞書を購入した。中でもカラーで一番見やすいものを選んだ結果、ワンセグ対応のものになった。実を云えば、テレビは、こうやって人に自慢するとき以外、余り使用していない。やや高い買い物だったが、その分こうして楽しめる。

他にこの春の「デジタル軍拡」の一環として購入したものに、携帯電話とコンピュータを接続するためのソフトウェアがある。以前使用していたものは、携帯を新しくしたため使用できなくなったため。携帯とコンピュータを接続して何をするのかと云えば、スケジュール管理。

携帯のようにいつも持っているもので、スケジュールを一元的に管理しないと、いろいろな

²http://www.yodobashi.com/enjoy/more/i/cat_38974433_7458528_22865390_22865497/62134967.html

予定がバラバラにいろいろなところにメモされて、パニックが起こると、友人のT氏にアドバイスされて以来、携帯をスケジューラとして使っていて、その一元化されたスケジュールを、月単位や週単位で一覧するために、コンピュータのスケジューラ・プログラムにシンクロ³させるのである。その日一日の予定は、携帯の小さな画面でも充分わかるが、週単位や月単位、または、数ヶ月にまたがるスケジュールは、やはりコンピュータの画面で確認したいものである。

「そうですか、携帯にスケジュールですか？」

「そや、慣れたら、結構便利やで」

「へえ」

「メールと電話だけやないで、携帯の使い道」

「けど、うちは、予定は手帳に書いて、充分間に合うてますけど」

この春購入したもう一つのデジタル機器は、リニアPCM⁴レコーダー。つまり、アナログ信号をデジタル信号に変換して、録音する機械である。ローランド製で、電池駆動、SDカードに録音できる優れものである。SDカードにデジタル録音したものは、むろん、コンピュータに取り込めるのである。



Photo: EDIROL R-09 by Roland

Retrieved from YODOBASHI⁵

「けど、何に使いはりますのん、その機械？」

「生録とかもできるけど、基本的には、カセットテープをCDにしよと思て」

³シンクロ:シンクロナイズの略。「画面と音声を一させる」シンクロナイズ【synchronize】(「同時化する」の意) [株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁴ピー・シー・エム【PCM】(pulse code modulation) アナログ信号をデジタル信号に変換する方式の一。衛星放送の音声、コンパクト・ディスクの録音などに利用。パルス符号変調。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

⁵http://www.yodobashi.com/enjoy/more/i/cat_1045_23195604_46403210/53116040.html

「カセットを CD にどすか？」

「そや、英語の教材で、カセットしかないのん結構ある。それを CD にしたい」

「どうぞすな、今時カセットって、機械もだんだん無うなってますし、古なって潰れても、新しいのん買いませんしね」

「そや。だから、デジタル化して、CD にせんと」

「けど、センセ、その機械で、ちょっとマニアックどすな」

女将には白状しなかったが、学生時代にテープ録音した自演のロックも、デジタル化しておきたいと思っているのである。今でもさほど聞きたいと思う演奏では決してないが、テープが劣化して聞けなくなるのは、やはり辛い。

そういう訳で、今春のデジタル軍拡は、かなりのモバイル軍拡となった。マニアックと云えば、以前の職場で一緒だった O 氏は、かなりのモバイル・マニアで、電池仕掛けの電子道具大好き人間。凶らずも、O 氏の趣味に感染していたのが、今頃発症したのか？

ちなみに、最近、読売新聞で見かけた生井英考の論考⁶によると、「モバイル」という「言葉」または「イメージ」は、男を象徴しているのだとか。男性用エステ家電が、必要上からではなく、どういう訳か、折りたたみ式で、持ち運びできるデザインが多く、女性用はそうではないと云う観察から、「モバイル」は男の象徴という「イメージ」のみに由来していると云う。更に：

これは男女を分かつデザイン上の性差がいまや機能 (=実態) ではなくイメージ (=通念) の領域でしか存在しなくなっているということの証なのである。

そう云われてみると、なるほどと納得もするが、自分も含めてそうになっている現代の男と女が、何となく、哀しく思えるのは、どうしたものだろう。意図してそうしたわけではないが、今春のモバイル軍拡は、失われつつある男らしさ求めて？

「けど、センセは新しいのがお好き」

「そんなことないけど、意識して新しくせんと、なんや置いていかれる気いするねん」

「それが、若さの秘密どすか？」

「まあな」

また、やまこを張って嘘をついてしまった？この春の「デジタル／モバイル軍拡」のもう一つの目玉は、新しい老眼鏡である。女将には正直に白状しなかったが、最近眼の疲れが酷く、新しい眼鏡が必要だとやっと自分を説得して、おととい眼鏡屋へ行った。しっかり検査してもらってレンズを調整してもらおうと、新聞紙の細かいところもよく見えた。

⁶生井英考(2007, February 22). 「モバイルは男の象徴？」『デザイン季評』読売新聞 朝刊。

いつまでも若々しいと云われたくて、「老眼鏡」と云う言葉さえ避けて通った私であるが、もう逃げられない。あるいは、もう逃げないで、眼鏡をかけることにした。

来週の木曜日にできあがることになっているのが、少し楽しみになってきた。老眼鏡を携えて外出し、携帯やデジカメなどのデジタル／モバイル機器を、楽々と操作する自分が待ち遠しい。眼鏡はデジタルではないが、デジタル機器の基礎と云える。

いつもの春とはひと味違う、この春のデジタル／モバイル事情である。(Sunday, March 11, 2007)

春の訪れの前に・・・

理事 山田昌子

午後7時。街灯などすべての電気が消され、突然あたりは真っ暗となった。見物人の携帯電話の明かりだけが蛍のように小さく光っている。手袋を忘れて来たため、立っている私の手は、段々冷たくなり、感覚が無くなっていく。「ボアのついた半コートを着てよかった！今年も地球温暖化のせいで暖冬だからまだマシや。でも、それでも5時半からここに立ってるし、やっぱり寒い！」いくら3月初旬とはいえ、年によってはマイナスの気温になることもあるらしい。

ほどなく、二月堂^{註1}の回廊で大きな松明が点火された。見物している二千人程(?)の観客から思わず「わー！」という歓声が上がった。私の隣りに立って見ていた男性が横の奥さんらしい女性に「あの松明、65キロほどあるんやで。簡単には上がらへんねん。」と説明している。松明は数名の僧侶に抱えられているのだろうか。暗くて見えない。が、真っ暗闇に赤々と灯された大きな火の固まりは、向かって左側に見える回廊をゆっくりと上がり、二月堂の欄干へ進んでいった。観客は、待ちに待った情景を見逃すまいと食い入るように見つめる。松明の先にある火の固まりは、二月堂を赤々と照らし、ゆっくりと欄干を走る。堂内からは、練行衆と呼ばれる僧侶たちの、仏に過ちを悔い祈る荒行の音や祈願の音が聞こえてくる。さあ、クライマックス！火の固まりは大きく欄干で振られ、その動きと同時に舞い散る火の粉は、大きな線香花火のそれのように最後まで赤々と光り、最後に地に落ちていく。観客の歓声と拍手が起こる。



これは、東大寺二月堂のいわゆる「お水取り」という行事で、堂内の十一面観音に悔過^{註2}をする行法で、天下安穩・五穀成熟・万民豊樂を祈願するそうだ。752年に始まってから今年で1256回目、一度も中断することなく続けられて来たそうだ。そして、奈良では、「お水取り^{註3}がすむまで春は来ない」と言う。

3月9日、私は同僚に連れられて生まれて初めてお水取りを見に行った。3月12日最終日の夜は、松明は12本すべてが欄干に上がるので、その情景は壮観だという。が逆に相当の参観者が見込まれるため、私たちは断念した。それでも10本の松明が1本ずつではあるが次から次へと欄干を走り、火の粉が舞い上がるその様子は、壮観だった。元来は、行法を行う練行衆の足元を照らすための松明だそうだが、私の目には、真っ暗な冬に少しずつ蓄えられてきた大きなエネルギーが、ぱっと灯され、赤々と燃えているように写った。そのエネルギーは右膝を大きな板に打ち付けるという僧侶たちの荒行のエネルギーに共通するところがあるのかもしれない。また、千年以上の歴史の中には、松明の火が二月堂をも燃やし火事を起こした事があるが、それでも堂内の行法は続けられたという。春の訪れの前には、厳しく寒い冬があり、それに耐え乗り切るには大きなエネルギーが大切なのだろう。

12日にはお水取りが終わる。厳しい寒さの、厳しい修行に耐えたからこそ、春の訪れが明るく、やわらかく暖かく感じられる。今は卒業式シーズンたけなわ、春の訪れを強く感じて巣立っていった若者も少なくないのかもしれない。

私事で恐縮だが、私は、先日ようやく今年秋学期からのサンフランシスコ州立大学の M. A.

TESOL プログラムへの修学許可の知らせを受けた。正式の合格通知や京都府教育委員会の許可はまだ得ていないが、これから2年間の留学の厳しさを少しずつ感じ始めている。でも二月堂の松明の赤々と燃える大きな火の固まりは、春の訪れの前の修行の厳しさを感じさせてくれると同時に、気のあかん私を大きく励ましてくれているような気がした。



註1: にがつどう【二月堂】

奈良の東大寺境内にある堂。752年(天平勝宝4)東大寺第2世実忠の創建。毎年2月(今は3月)朔日から14日まで修二会(しゅにえ)を行うからいう。現今の道宇は1669年(寛文9)徳川家綱の再建。羅索院。(「広辞苑」より)

註2: けか【悔過】

①罪を悔いること。懺悔すること。

②己が罪を懺悔し、罪報を免れることを求めるために、薬師・阿弥陀・吉祥天などを本尊として一定の作法によって行う儀式。今昔物語集(16)「題恵禅師といふ人を請じて十一面観音の一を行ふ」(「広辞苑」より)

註3: おみずとり【御水取り】

東大寺2月堂の行事。3月(もとは陰暦2月)13日未明、堂前の若狭井(わかさい)の水を汲み、加持し、香水とする儀式。修二会(しゅにえ)の行事の一。<(季)春>(「広辞苑」より)

※ 2枚の写真は、3月9日山田による撮影である。

2 1 世紀の学問の神様

塚 本 美 紀

鳥居をくぐると、薄暗い境内の中に白い梅の花が、ポツン、ポツンと浮かんで見える。少し春めいてきたとはいえ、日が暮れるとやはり寒い。きよろきよろといろんなものに興味を示す中国から来た二人の少女を少し急かして、手水舎で手を洗い、本殿へと急ぐ。

先月、私の勤務校に2名の中国人留学生が2週間滞在した。Tさんは、天津の外国語を専門に教える高校に通う16歳。英語と日本語を流暢に話す。Oさんは、内モンゴル出身の16歳で、少し込み入った会話まで英語でこなす。二人のホストファミリーが部活動で遅くなるというので、彼女たちを待つ間、留学生二人を学校のすぐ近くにある菅原神社に案内した。名前から想像できるように、菅原道真ゆかりの神社である。この地は、道真公が左遷され大宰府に赴く際、一泊したと伝えられている。本殿の前で、大きな鈴を鳴らし、二拝二拍手一拝。何をお祈りしていたのか、二人はしばらく目を閉じて合掌していた。

15年ほど前、修学旅行のために北京へ生徒を引率したことがある。その時、北京の高校生との交流会を行ったが、そこで出会った高校生たちと、今回来日した高校生たちとはずいぶん違って見える。TさんもOさんも、日本の子供たちと同じような服装をし、日本のアイドルの話題で盛り上がる。私の知らない名前が次々にあがり、話にさっぱりついていけない。デジカメで次々といろいろなものを撮影し、メディアがいっぱいになったら持参しているノートパソコンに転送する。少し時間ができると、パソコン教室で中国にいる友人とチャットを楽しんだり、家族へ日本での生活を報告するメールを送ったりしていた。

映画好きのTさんは、中国からお気に入りの映画のDVDを何枚か持参していた。中国では勉強漬けの毎日だが、たまにはリラックスすることも必要で、そんな時にDVDを見るといふ。面白そうな顔の青年の写真がついたDVDを私に見せながら、「先生は***を知っていますか？」と言う。「え、何？」と私。「中国の映画俳優です。面白い人で、ハリウッドで言えばジム・キャリーのような人です。あ、でもジム・キャリーはどちらかという面白いことを顔で表現しますが、この人は言葉で表現します。」とTさんが説明してくれた。「ハリウッド」をものさしにして会話が成立するなんて面白いなあと思いながら、気づかないうちにいろんなところに「グローバルイゼーション」が潜んでいることを感じた。

彼女たちの帰国後、中国から電子メールが届いた。Tさんは、帰国後すぐに高校で行われた日本語のテストで一番になり、これはきっと菅原神社のおまもりのお陰に違いないという。映画好きの彼女はもっと勉強して、将来は世界の人々に受け入れられる作品を作る映画監督になりたいそうだ。Oさんは、北九州を離れた後に訪問した京都の神社を見ては菅原神社を訪問した夕べを思い、大阪の高校で行われた討論会に参加しては私たちの高校で過ごした日々を懐かしく思い出したという。Oさんは、英語だけでなく全ての科目を一生懸命勉強し、

中国と世界の国々との架け橋になりたいという。太宰府天満宮の梅を見るたびに、菅原道真はそんなに九州のことが嫌いだったのかと少し苦々しく思っていた私は、Oさんのメールを読んで、少しリベンジできたような気がして、心の中でちょっとにんまりしてしまった。学問成就のおまもりを大切にする一方で、時間も距離も楽々と飛び越えて活躍しようとする彼女たちのことを、道真公が見たらどう思うだろうか。21世紀の学問の神様は、もう九州に左遷されたことを嘆いてなんかいないと思いたいし、時間の壁も距離の壁も乗り越えて、学問を通して身に着けた智恵で勝負しようとする彼女たちのことをきっと応援してくれていると思う。

e-dream-s ホームページと E C A P 2007

仙崎裕右

昨年8月、e-dream-s 総会で私はこう報告した。

「e-dream-s ホームページに英語のページを作ります。」

すみません。まだできていません。

きっかけは昨年春。E C A P 2 0 0 6 の準備のため、韓国側のSeoulSETAのことをもっと知りたいと思い、向こうのHP⁷を探していた。しかし、タイトル部分以外はハングルのみで書かれており、リンク先が何のページなのか、さっぱり分からない。テキストにたどっていても、良くわからないままである（英語はPresidentのイ・ビョンホ氏の挨拶だけである）。と、いうことは、逆を考えて、向こうの先生も同じだろうな、とそこで気がついた。最低限の英語の説明は以前からあるので、せめて、E C A P の報告ぐらひは作らなければ、と思ったまま、現在に至っている。先月後半から、準備をぼちぼち始めている。まずはトップページからきれいに・・・なんて思ってフリーのF l a s h⁸素材を探してきて、それをいじってみたり（しかし、特殊なソフトが必要なので本格的な改変はできない）している。うまくいかず、その間にパソコンを落っことしてしばらく修理に出すはめに陥ってしまった。パソコンは無事復活したので、ようやく合間を縫って作業を再開したいと思っている。これまでHP作成時はテキストエディタで命令を直接打ち込んでいた。今回、ついに「ホームページビルダー」を買った。F l a s h もなんとかできそうである。新1年生の担任に入るので、春先、かなり多忙になってしまうが、なんとかして公約を守りたい。皆様も見ていただいて、感想、それより注文をつけてください。

サーバの問題もまだ解決できていない。1月の理事会で報告したが、e-dream-s・ACROSS・@aglace、それから、e-dream-s アドレスのメール。全て1つのサーバで管理している。これまでのデータの蓄積でかなり残り容量が少なくなっている。また、容量を食うわけではないが、迷惑メールが大量に来るので削除に追われている。残念ながらこれはどうしようもない。

E C A P 2 0 0 7 に向けて動き始めている。無事に会場も決まり、スケジュールも固まりつつある。今回の目玉である「日韓文化交流」をどうするのかについては、まだ輪郭はできていないが、春に向け、準備状況もHPで報告できるだろう。その時は、韓国の先生方にも見てもらえるように、英語のページも準備できるかな。具体的にはまだ何もできていないが、

⁷ <http://www.seoulseta.net/> 画面上の方を見ていると、E C A P でおなじみのメンバーが写っている。

⁸ アクロスや@aglaceのトップページにあるような、画像が動く（だけではないが）、いわゆる「カッコイイ」ページを作るためのプログラム。

私も今回実行委員に名前を連ねさせていただいた。前回、ユンビンを始め、韓国の先生方と深いつながりができた。今回も同じ、いや、それ以上の濃密なつながりをもてたらいいな。

編集後記 もともと機械音痴で、新しいものに手を着けるのが苦手である。パソコンにしても ACROSS で、英語教師ならパソコンくらいできなくてどうする、というようなこと言われて初めて購入した。億劫がってはいるものの、心の中では、使いこなせたら便利なんだろうなあと人をうらやましく思ったりしている。「デジタル軍拡」とまでは全然いかないけれど、職場が変わるこの3月を機に私もひとつでも新しいものを使いこなせるようにしたい。 (岡田)